

高校教育と看護教育との関連

小 田 武
松 村 将

(1) ま え が き

『京都大学教育学部紀要』の前号で、私たちは高校教育と百貨店業務との関連について考察した。今回は高校教育と看護教育との関連をとり上げるのであるが、百貨店業務が高校を卒業した女子の代表的な職業の一つであり、看護業務がやはり女子の代表的な職業の一つであることを思うと、私たちは女子の代表的な職業をめぐる教育の問題に直面しているということになる。ただ、看護業務は専門職であり、高校教育と就職との中間に高等教育段階の教育期間を必要とする。ところで、このような看護教育に現在当たっている学校の多くは、大学医学部にまたは大病院に付置された三年制の看護学校である。看護学校は高校教育の基礎の上に人間の生命に関する職業教育を行なうものである。その際、看護教育の重大さを思うと、一般教育も充実している四年制大学の形での看護教育が望ましいので、三年制看護学校を四年制大学にする動きが出てきている。四年制大学にすることによって、看護教育の専門性を強化するとともに、一般教育も充実されることによって看護婦養成の場合に人間性を洗練する自由教育の雰囲気をもたせることができるのである。けれども、現在では看護学校による看護教育が一般的であるので、そのような看護教育とその前段階である高校教育との関連を検討して現在の学校体系で果たされていることと果たされていないことを見出したいと思う。

そこで、京阪神地区にある或る看護学校の全学生に対して別記のような「高校教育と看護教育との関連についての調査」を行なった。意見を求めた学生は、1年生が40人、2年生が34人、3年生が40人の計114人であり、調査期日は昭和41年3月1日である。さて、のちの考察の便宜上ここで学生の出身地と高校での所属課程および家族構成についての資料をまず示しておきたい。

第1表からも明らかなように意外に京都・大阪出身者が少なく14%にすぎないのに対し、中国・九州出身者がそれぞれ39%、25%で、両方合わせると64%になり、2/3近くを占め

	1年	2年	3年	計	%
九州	9	8	11	28	25
中国	16	13	15	44	39
四国	1	3	2	6	5
大阪府	0	1	0	1	1
京都府	7	4	4	15	13
その他の近畿	3	2	4	9	8
北陸	3	2	1	6	5
関東	1	1	3	5	4

第1表 学生の出身地

ていることは注目すべきである。

課程別では原則として普通課程履修者を受験資格としている関係もあってか、商業課程の1人を除いて全員が普通課程履修者である。また、共学の高校出身が109人であるのに対し、女子高校出身は5人にすぎない。地方出身者が多いこともその原因の一つになっているのではあるまいか。

つぎに、「あなたには兄弟姉妹が何人ありますか」と「あなたは兄弟姉妹の何番目に当たりますか」という質問から、家族構成の輪郭をある程度つかめるのではないかと思う。第2表によると、本人を含めて3人までというのが39%であるのに対して、4人から5人までが39%、6人以上が22%となっており、大家族の子女が多いことがわかれると思う。

兄弟数 番目	0	1	2	3	4	5	6	7	8
1	4	7	19	12					
2		3	10	6	7	1	1		
3			1	9	3	1	1		
4				3	3	5	1		
5					1	5	1	1	
6							1	1	3
7								2	

第2表

(他に10人兄妹の7番目という人と11人兄妹の8番目という人がそれぞれ1人いる。)

しかも、もう少し詳しく見

ていくと、6人兄妹以上の人で自分が3番目までとするものが4人であるのに反し、6番目以上の人が9人もいるのである。この人たちが終戦前後に生まれていることを思うとき、戦前の家族形態から戦後のそれへの移行のありさまがここに象徴的にあらわれていると言えよう。そして、この事実が前述の出身地別統計にあらわれた特色とともに看護教育を考える上での一つのポイントになっているように思われるのであるが、これについてはのちに触れることにしたい。

なお、昨年度私たちが高校教育と百貨店業務との関連を調べたものは、今度の調査対象とはほぼ同じ年令層に属する人たちを対象とするものであったが故に、進学と就職という異なった進路が高校生活全般とどのような関連をもっているかがある程度明らかになるのではないかと考えて、今回も前回とほとんど同じ内容の調査事項で高校生活についての回答を求めた。従って、前回の調査結果を随時比較の対象として参照して考察を進めていくことにする。

(2) 高校進学について

高校進学に際して誰が中心となって志望高校の選択がなされているであろうか。114人のうち80%が「自分」と答えており、「両親」が9%、「先生」が8%と少なく、前回の調査の対象であった百貨店へ就職した人たち(今後この人たちを就職グループと呼ぶことにする)よりも「自分」が中心となったという割合が高くなっている。また、53人(47%)が高校をさきを選んだと答え、51人(45%)が自分の将来を考えてコースをさきに決定し、そののちそのコースのある高校を選んだと答えている。

ところで、コース選択は果たして好ましいものであったであろうか。「三年間学んだ結果から

みて、あなたの選んだコースは自分に適していたと思いますか」という質問に対して、97人（85%）が適していたと答えており、適していなかったとしたものは4人（4%）にすぎない。109人中18人が適していなかったと答えている就職グループにくらべるとひじょうに少ないことがわかるが、看護学校に進学した人たちを対象とした調査としては当然の結果であるとも言える。

最後に、コースをさきに選んだとするもので自宅から通学可能な学校がありましたかという質問に対し、あったとするもの42人、仕方なくコースを変更したもの1人、やむなく遠方の学校へ行ったとするもの7人となっている。高校にあまり恵まれてはいないと思われる地方出身者の多いこの調査において、このような回答を得られたのは喜ばしいことであるが、それが普通課程履修者の場合についてであるということをお忘れはならない。

(3) 高校の教科について

「高校時代の好きな教科にどのようなものがありましたか」および「高校の教科のうちで現在の学生生活に役立っていると思う教科がありますか」という質問に対してつぎのような回答を得た。

第3表によると、数学・国語・英語が好きであったという人が多いことがわかる。また、現在の学生生活に役立っている教科として指摘されたもののうち、生物・化学が多いのはこの学校の教育目標からしてもっともなことであるが、そのほかに国語・英語をあげているものが案外多いのは就職グループの場合と一致している。

これに関連して、もっと時間数を増すなり新しく設けるなりしてほしい教科があれば書いてほしいと求めたところ64人から回答を得た。主要なものをあげてみると、英語24、化学21、生物学8、国語8、ドイツ語7、数学5、哲学5、社会学4、心理学4、家庭4、物理3、歴史3、となっている。化学・生物学の強化を望むほか、ここでも英語・国語に対する要求がひじょうに強いことがわかる。言語の習得によってはじめて学習経験が生かされ、学習者の血となり肉となると言われている。英語および国語の充実が必要である。

なお、興味をひくのは看護学校での教養科目の一部となっていることも手伝っていると思われるが、ドイツ語・哲学・心理学を高校

		好きな教科	役立っている教科
数	学	48	6
生	物	26	44
化	学	23	39
物	理	5	5
国	語	39	25
英	語	33	27
社	会	11	10
歴	史	29	2
地	理	1	0
家	庭	2	0
音	楽	7	4
美	術	4	0
書	道	2	0
保	体	3	3
珠	算	1	0

第 3 表

(回答者数 好きな教科：114人)
役立っている教科：71人)

京都大学教育学部紀要Ⅻ

で学習しなかったという人が数人いることである。しかし、高校のカリキュラムの現状からしてこれらを正規の授業に組みこむのは困難であろう。それでもドイツ語などの語学および哲学・心理学といった精神科学は高校生が学んでも得るところ大であると思われるので、同好会といったものによって希望をかなえ得るように配慮することも必要なのではないかと思われる。

逆にあまり役立つように思われないから廃止するなり時間数を減ずるなりした方がよいと思われている教科はないであろうか。別にないとするものが大多数で、3人が家庭科を、2人が物理をあげているのが目立つ程度である。大体において現在の高校のカリキュラムが学生たちによって支持されていると考えることができよう。

クラブ活動については節をあらためてとり上げることにして、クラブ活動以外に学校の外で習っていた人はどのくらいいるであろうか。30人がそれに該当しているが、教科に関するめばしいものでは、英語・英会話10、珠算5、数学2であり、教養的なものでは、華道8、茶道2、ピアノ2となっている。英語・数学に受験準備の影響があらわれていると受けとれなくもないが、人数も少ないし、クラブ活動も相当やっており、かれらに関しては受験準備によってそんなに毒されてはいないようである。

(4) 高校のクラブ活動と生活指導

課外活動は、教科学習においてはややもすれば欠けやすい生徒と教師および生徒間の直接的な関係を促進し、自由な集団活動を通じて協調性・社会性を養い、学習と実践とを結合する媒体となるといったすぐれた特色をもっていると考えられる。クラブ活動がこの課外活動の中心をなすものの一つであることは明らかであって、そのため学習指導要領においてもクラブ活動が適切な教育的配慮のもとに活発に行なわれることを奨励しているのである。

ところで、調査によると、高校時代にクラブ活動をした経験があるものは88人で、そのうち運動クラブに属していたものは(文化クラブにも属していた者がある)33人(37%)であって、文化クラブにのみ属していたもの55人(63%)とくらべてかなり少ないことがわかる。クラブ活動をしたもののうち、勉強と両立しえなかったとするものは文化クラブでは6人(11%)であるのに対し、運動クラブでは7人(21%)となっていることも示しているように、このことは、どうしても運動クラブに入ると時間に拘束される度合いが強く、よほど強い意志をもっていないかぎり勉強に力を入れることが困難であるという現実を反映しているのではないかと考えられる。しかし、運動クラブは身体を鍛え、強い精神力を養い、真の親友を得る機会に恵まれ、腹藏なく語りあえる教師にめぐり会えるというような文化クラブに見出しにくいものをもっているが故に、ただ対外試合に勝つことに熱中するばかりでなく、誰でも進んで参加できるような運動クラブにするように、その運営に際して指導者は特に心がけるべきではないかと思う。

さて、回答にあらわれたクラブの種類は文化クラブ27、運動クラブ12にわたっているが、その

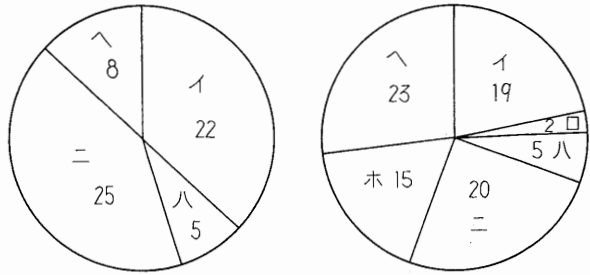
うち主要なものをあげてみるとつぎのようになる。まず文化クラブでは、音楽11、化学7、新聞6、美術6、華道6、文芸5、英会話5、青少年赤十字団4、書道4、茶道3であり、運動クラブでは、バレーボール8、体操6、テニス5、卓球4、バスケットボール3となっている。就職グループの場合とは違って華道が案外少なく、それに比べて化学・新聞・英会話が割合多いことが注目される。

第1図はクラブ活動に参加することによってどのようなプラスを得たと考えているかを示したものである。それによると、やはり、趣味を豊かにすることができたとするものと親しい友だちができたとするものが多いが、自分のいろいろな問題について相談にのってもらえる親しい先生ができたという人が2人しかいないのはさみしいかぎりである。教師が

仕事に追われてクラブ活動に参加できないためなのか、あるいは生徒たちが意識的に教師を避けるためであるのかはわからないが、人間的な触れあいが期待されているクラブ活動において、このような結果が出ていることについては反省の要があると思う。

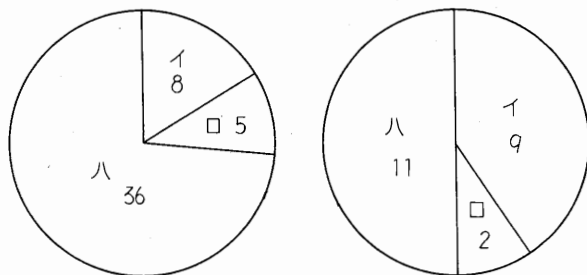
ところで、高校時代のクラブ活動が看護学校で活かされているであろうか。就職グループの場合は「会社でクラブ活動をしていますか」という問に対して13人がイエスと答えており、しかもそのうち8人までが高校時代のクラブ活動と同じ内容のものをしていると答えていた。ところが、後に詳しく触れるが看護学校でクラブ活動をしている81人のうち、いまのクラブを選んだのは高校時代にすでにやっていたなじみがあるからとしたものが18人にすぎず、50人がここに入学して新しく関心をもつようになったからというのをその理由にあげている。(第2図参照)このあざやかなコントラストの原因は複雑であろうが、学生生活と社会人生活とがそこに入ってくるそれぞれの人間に与える影響の相違といったものを如実に反映しているようで興味深い。

それではクラブ活動をしなかった26人の意見を聞いてみよう。通



第1図 (数字は実数)

- | | |
|--------------|---------------|
| 文化クラブ | 運動クラブ |
| イ、親しい友だちができた | (文化・運動クラブの両方) |
| ロ、親しい先生ができた | は入っているものを含む) |
| ハ、交際上手になった | ホ、身体が丈夫になった |
| ニ、趣味が豊かになった | ヘ、精神の修養になった |



第2図 (数字は実数)

- | | |
|-------------------------|---------------|
| 文化クラブ | 運動クラブ |
| イ、高校時代にしていたから | (文化・運動クラブの両方) |
| ロ、友だちにすすめられた | に入っているものを含む) |
| ハ、ここに入学して新しく関心をもつようになった | |

学に時間がかかり時間の余裕がなかったからというものが11人で最も多く、ついで、やる気がなかったからというものが6人、自分に合ったクラブがなかったからが5人、勉強にクラブ活動のための時間を注ぎたかったからが4人となっている。通学時間の問題が第1位を占めているところに地方の高校生の悩みの一面があらわれていると言えよう。

つぎに、学校の生活指導に対する生徒の受けとり方はどうであろうか。「あなたの高校は服装や男女交際などについてきびしかったと思いますか」という間に対する回答と、「そのような学校の態度が今から考えて自分たちのためになったと思いますか」に対する回答との関係を調べてみた。(第4表参照)

学校の態度はあまりきびしいものではなかったものの、はめをはずすときびしく注意されたが、これは自分たちのためになったとするものが67人と最も多く、生徒の自由にしていたがこれが自分たちのためになったとするものが11人となっている。学校の態度がひじょうにきびしかったとしたものうち、

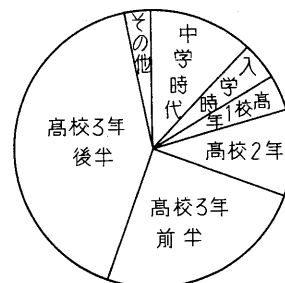
	非常にきびしかった	普通	生徒の自由にまかせた	計
ためになった	7	67	11	85
もっときびしくしてほしかった	0	6	0	6
もっと自由にしておほしかった	9	10	0	19
計	16	83	11	

第4表

もっと生徒の自由にさせてほしかったというものが9人で、自分たちのためになったと学校の指導方法を肯定しているもの7人よりも多くなっており、さらに、生徒の自由にさせていた学校の態度を自分たちのためになったと全員が考えているのであって、この点でも就職グループの場合とは異なった結果となっている。高校時代を客観的に評価する能力を、まだ学生であるというところから、もてないということにその原因の一つがあるのかもしれないが、いずれにしても学校の生活指導に対して意見の相違が見られることでもあり、この際、どこまで生徒の自由を許すかについての一般的な基準を教育的見地から再検討することも必要ではないかと思われる。

(5) 看護学校への進学

高校を卒業したら看護学校に進学しようといつ頃きめましたかという質問に対して、第3図のような結果を得た。自分は将来看護婦になるのだと中学時代にすでにきめていたのは14人(13%)しかおらず、高校3年になってからきめているものが77人(67%)と大半を占めている。この事実をいかに見るべきであろうか。必ずしも自分の年来の希望がかなってこの看護学校に学んでいるものばかりではなさそうである。いろいろの事情から不本意ながら看護学の勉学にいそんでいる人が少なからずいるということが上の結果から十分に考えられる。しかし、この際大切なことは、どんな事情によって入学したにし



第3図

る、これらすべての学生に看護学の研究に積極的に取り組み、そこに自らの生きがいを見出すように指導し励ましていくことであると言えよう。

つぎに、進学について主として誰に相談をもちかけているであろうか。両親が一番多く54人、高校の先生が29人でこれにつき、あとは友だち17人、中学の先生と兄弟がそれぞれ4人となっている。これだけから判断することは危険であるが、就職グループの場合、高校の先生としたものが41人もいたことを考えあわせると、進学に関しては就職の場合よりも高校との連絡がうまくいっていないように思われる。このことは進学の世話を主にしてくださる専門の先生がいたと答えた91人のうち、その先生によく相談をしたというものが14人、逆に、相談しなかったというものが33人もいることにもあらわれていると思う。(第5表参照)これに関連して「あなたの高校はあなたの進学についてよく世話をしてくれたと思いますか」とたずねてみた。その結果が第6表である。第5表と第6表を比較してみると、生徒たちが相談をもちかけるのが少ないにもかかわらず、学校側はかなりよく進学の世話をしてくれたと受けとられていることがわかる。

さて、この看護学校を選んだ理由として、看護婦養成という明確な目標をもったこの学校が自分の将来の希望にあっていたからとするものが114人中70人で圧倒的に多く、高校の先生にすすめられたからが11人、先輩がここにいるからが8人、両親にすすめられたからが最も少なく7人となっている。だが、ここで気がかりなことは、この学校が身分の将来の希望にあっていたからと答えているのが70人であることである。

	よくした	時々した	しなかった	無 答	計
実 数	14	41	33	3	100
%	15	45	36	4	100

第 5 表

	よくして くれた	普 通	あまりして くれなかつた	無 答	計
実 数	32	56	25	1	114
%	28	49	22	1	100

第 6 表

(6) 看護学校での勉学について

まず、はじめに、「当校での勉学はあなたの期待を満していると思いますか」とたずねてみた。その結果によると、満足しているものは1年生6人、2年生2人、3年生3人にすぎないのである。期待が大きすぎたために失望し、意気込みが挫かれるということは進学に際していつも少なからずつきまとうものであるが、それにしてもこんど場合はかなりひどいように思われる。もちろん、ひとり学校のみならず、学生および広く社会に帰せられるべき原因も考えられようが、ここで不満である理由として学生があげるところを聞いてみよう。第7表は各学年別に不満の理由をまとめたものである。教養科目が少ないというのが各学年を通じて多く、それについて低

学年では教師の講義のまずさおよび教授意欲の乏しさを指摘するものが多いのに反して、高学年では表面的な学習および学生の自主性が閑却されていることをあげているのが注目される。なお、少数ではあるが、学生たちの間に勉強するのだという活気に乏しいことをその原因にあげているものがある。

	1年	2年	3年	計
教養科目が少なすぎる	5	4	5	14
表面的な学習, 中途半端な科目	2	3	8	13
暗記科目が多すぎる	2	1	6	9
講義のまずさ, 教授意欲の乏しさ	6	3	3	12
専門科目に対する不満	0	2	2	4
学生の自主性が生かされない	1	3	7	11
勉強するのだという活気がない	2	2	0	4

第 7 表

看護教育の主要な位置を占める看護実習についてつぎに意見を求めた。実習時間数に関する意見を第8表に、実習についての希望を第9表にあらわした。実習時間を「もっと増してほしい」という希望がひじょうに少なく、「このままでよい」と「多すぎる」という意見が伯仲していることからして、実習が学生にかなりの負担となっているようである。従って、この実習時間が形式的なものにおちいることなく、教育上有意義なもの

	多すぎる	このままでよい	もっと増してほしい	計
1 年	17	19	1	37
2 年	5	20	8	33
3 年	26	14	0	40

第 8 表

のようになるように、教師・学生が一体となって努力することが必要であるように思われる。学生の実習に対する希望を見てみると「単なる雑役としてではなく、学生の身分を認識して実習の指導をしてほしい」とか「実習はあくまでも自分の勉強になるように、すなわち、研究の場であるようにしてほしい」といった意見に見られるように、実習はあくまでも教育の場なのだということをはっきりと認識してほしいというのが圧倒的に多い。さらに、これに関連した「実習指導専門の教師がほしい」という意見があり、これについてもよく検討されるべきであると思う。

	1年	2年	3年	計
学生という身分を考えて実習を指導する	7	13	5	25
実習指導専門の教師がほしい	1	4	6	11
考える実習にしてほしい	1	2	3	6
実習と学科との組合せを工夫する	1	2	2	5
実習目的の徹底	2	1	2	5

第 9 表

専門科目をもっとやさしいものにしてほしいというのはわずか1人にすぎず、反対にもっと専門的なものにしてほしいと考えている人が32人と相当な数になっている。だからこの点から見る

かぎり学生の向学心の欠除といった問題は生じるように思われぬ。しかし、自主的に勉強しようとする態度ないし意欲は十分にあるのだろうか。一つの尺度として専門書購読をとり上げてみた。専門書購読に全然費用をさいていない学生が、第10表に明らかなように実に56人とほぼ半数に達しているのである。のち

に見るように、図書室の充実を望む声がひじょうに多いことを考えると、図書室の利用だけで専門書の必要を十分に満しているとはもともと考えられない。それ故に、経済的

	0円	100	200	300	400	500	600~ 700	800~ 1000
1 年	21	3	9	0	0	0	1	5
2 年	19	3	4	2	0	3	1	2
3 年	16	1	10	5	2	4	1	1

第 10 表

な理由はあるにせよ、自ら進んで勉強するという意気込みに全体として欠けるところがあるのではなかろうか。もっとも、専門書購入費の現状に満足しているという人は11人と少なく、不満であるがこづかいそれ自体が少ないので仕方がないという意見が圧倒的に多いことに救われる気がする。経済的に苦しいにもかかわらず就職後も研修の糧となる専門書を購読するのだという意欲がほしいように思う。

つぎに、専門科目として新しく設けてほしい科目としては、ドイツ語医学用語5、カウンセリング5があり、廃止してほしいものとしては、看護歴史6、看護倫理5がある。

第3に、教養科目に対してどんな希望をもっているだろうか。この学校での勉学に不満足である理由の第1位として教養科目の少ないことをあげていたが、ここでも教養科目を少なくした方がよいという意見の人は1人にすぎず、過半数の人は科目と時間の増加を望んでいるのである。

(第11表参照)そして、新設してほしい教養科目としては数学が13と最も多く、歴史学6、家政科6、英語・英文学5、政治学3、法律学3となっている。

	1 年	2 年	3 年
教養科目を少なくする	1	0	0
このままでよい	10	15	2
多くしてほしい	26	18	38

第 11 表

ところで、この看護学校ではすでに昭和9年(1934年)に英語・独語のほかには作法・裁

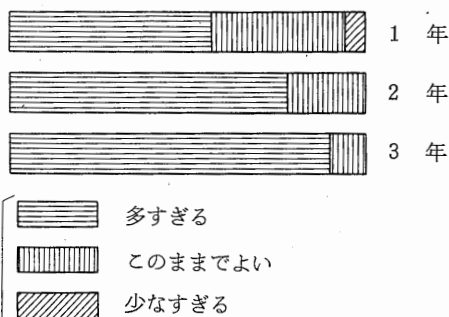
縫・国語・修身・心理学が教えられており、昭和12年(1937年)には書道と教育学が、昭和15年(1940年)には公民料が加わっているのであって、教養科目といわれるものに相当の関心が示されてきていると言えよう。

さて、この学校では医学の各分野にわたって研究テーマを選んでレポートを3年間に6つ提出することになっているが、これに対する学生の意見は第4図となる。

高学年になるほどレポート提出数の多いことが身にこたえているようである。しかし、医療の基礎をマスターするためには広い分野にわたってレポートを提出させることは必要であると思う。ただ、その際、レポート作成の教育的意義を一層高めるためにも各学生に対する適切な指導

と助言がなされなければならないことは言うまでもない。

つぎに、「学校の設備についての希望があれば書いて下さい」と求めたところ、「すべてに不満」11をはじめ、さまざまな希望があらわれた。最も多いのは図書の実47で、以下、運動場の整備15、学校と寮の分離11、標本室の実6、実験室の完備5、休養室の設置5、教室の改築5となっている。



第4図

問題を転じて、看護婦という職業は学生たちの目にいかに映っているであろうか。社会的地位、労働条件、報酬の面から調べてみたが、全般として言えることはひじょうに不満足な状態にあると考えているということである。社会的地位が中ぐらいであったのは7人にすぎず、大多数のものは低く評価されていると受けとっている。しかし、「世間では低いように思われているが、自分は決して低いものではないと思う」10や「だんだん高まりつつある」4、「高いものになるように努力していきたい」4という前向きな意見を述べている人もいる。労働条件についても「普通」と答えた人は7人にすぎず、人員不足による慢性的な労働過重を訴えている人が多い。病院での実習を通して痛感しているからではなかろうか。報酬については「普通」が14人、「よくない」が68人、「わからない」が15人となっている。学生の見たところではまだまだ看護婦という職業は恵まれたものではなさそうである。

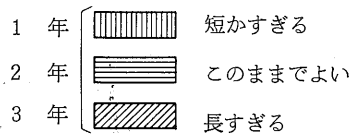
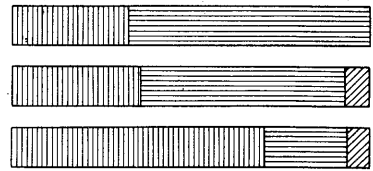
ここで、大学化の問題をとりあげることにする。まず、学生の意見を聞いてみよう。大学化に賛成するものが92人(81%)、反対するものが5人(4%)、わからないという人が17人(15%)となっている。その賛成理由としては、「大学になれば看護婦の地位向上に役立つ」というのが最も多く31人で、ついで、「現在でも大学なみの勉学が要求されており、内容的には大学になってもおかしくない」というのが24人となっている。さらに、「学科の充実が可能になる」13、「看護婦の資質向上が期待できる」6、「学生の勉学に対する意欲がわく」5、「教養科目のための時間がふやせる」4とつづいている。他方、大学化反対の意見については、それらも決して大学化そのものに反対しているのではないのであって、現在の学生の勉学に対する態度・意欲からは大学にできそうには思えないという率直な反省の声にすぎないと言える。

しかし、大学化を妨げている条件も現に存在するということを忘れてはならない。すでに「まえがき」において見たように、この学校の場合、中国・九州地方出身が目立ち、しかも多人数兄妹の人が案外多かった。このことから経済的にあまり恵まれていない人が多く在学していると判断するのは少々問題であろうが、と言ってそうではないと断定することもできない。少なくとも若干の人々にとっては全寮制・無月謝でしかも専門的な技術を身につけてくれる看護学校は、これらの知的・学問的情熱を満してくれるものとなっていることは事実であろう。ところで、看護

教育を大学教育のレベルで行ない高度の知識と技術を身につけさせようとするれば、少なくとも4か年の修学期間が必要となり今よりも最低1年間はさらに勉学に拘束されることになるということが、経済的に恵まれない人々を閉め出すことになりはしないかという懸念を生じさせるのである。修学年限についての調査によると「このままでよい」という意見がわずかながら「短かすぎる」という意見を上まわっているのである。(第5図参照)それ故に、このデータの意味するところを無視しては大学化問題は空転しそうである。もちろん、奨学金の増額によってこの問題は幾分かは解決されようが、現在のような少額では問題の根本的解決にはほど遠いであろう。

最後に、自分たちの経験から看護学校への進学を希望している後輩に何を助言してやりたいと思っているであろうか。まず圧倒的に多いのは、看護婦になるのだと固く決心をしている人しか看護学校に進学すべきでないというものであって44人

いる。そのほか、看護婦という職業についての実態をよく知ってから進学を決意すること7、健康に自信があるかどうか考えてみること6、よくその学校の実態を調べること5が目立っている。高校側にも、進学指導の際特に看護学校のような専門教育をめざす教育機関についてはその実態をよくつかんでおくことが、要請されるわけである。



第5図

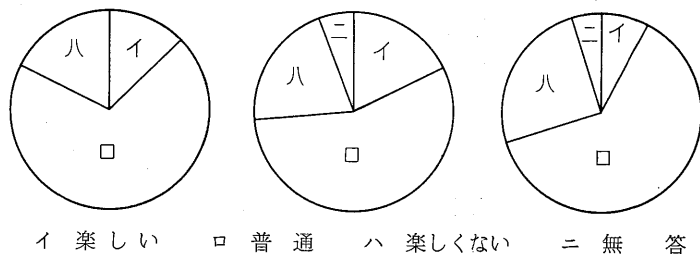
(7) 寮生活について

かれらは毎日楽しく寮生活を送っているであろうか。調査の結果では必ずしも楽しい生活を送っている者ばかりではないようである。(第6図参照)

まず、このことをふまえながら以下寮生活の実態を明らかにしていきたい。

第12表に示したところから明らかなように看護学校内では親友に恵まれていない。しかも、学年の間にほとんど差異が見られないのである。寝食をともにするところから、全寮制においては他の場合よりも生涯の親友を得る機会に恵まれると一般には考えられていることを思うとき、このような結果をいかに説明

することができるであろうか。このような事態を生み出した原因を的確に指摘することはできないが、真の人間的な触れあいの場がもたれておらず、表面的には立派な団体生活を営んでい



第6図

京都大学教育学部紀要Ⅻ

るように見えながら、核心においては精神的なつながりはほとんどなく、各人が孤立した生活を送っていることは確かであると思う。このことを裏書きしていると思わせるものを回答のあちこちに見出すことができるのである。

現在、この寮では一部屋に5人で、1年、2年、3年が

		0人	1	2	3	4	5	6人以上
学 校 内	1年	16	9	8	4	3	0	0
	2年	12	8	7	2	2	2	1
	3年	11	17	10	1	0	0	1
小 時 中 高 代	1年	6	5	4	11	2	5	7
	2年	4	8	2	8	6	2	3
	3年	3	8	9	11	3	3	3
市 し 内 の 新 友	1年	30	4	2	1	0	2	1
	2年	19	6	9	1	0	0	4
	3年	19	11	2	3	0	2	3

第12表 親友の数

混りあっているが、これは概して好評のようである。すなわち、1年では34人、2年で32人、3年で34人がこの制度に賛成している。賛成理由としてあげているところによると、「お互いに教えあうことによって経験が広がる」が26人と第1位で、つづいて、「昼間とは違ったメンバーとなるので気分が一新する」というのが13人いる。なお、その他の理由として、「部屋のメンバーの間にまとまりができる」6とか「他学年の人たちと一緒にいるとがつがつしたライバル意識から解放される」3、「少しでも家庭的な雰囲気になる」3があげられている。

寮の設備についての希望を求めたところ、暖房の完備31、全面的改築13、娛樂室の設置11、食堂の整備8、水道、ガスを室内に7、調理室の設置6、椅子式机とベッド6などが主たるものである。

部屋の運営は民主的に行われているとしたものが85人(75%)で、まとまりがなく運営についてはほとんど話しあわないという無統制型を指摘した人は24人(21%)であり、さすがに独裁型をとっているとした人は1人しかいなかった。しかも、各学年の間にほとんど差が見られなかったので、上級生は民主的に運営していると思っていることが、結果的には下級生によって民主的ではないと受けとられているといったくい違いはないと考えられる。

この寮では半年毎に部屋のメンバーの組替えを徹底的に行なっているが、それとは別に1回か2回部屋の模様替えをすることがほぼ慣習となっているようで、全然模様替えをしなかったと答えた人はわずか7人しかいなかった。模様替えをする理由としては、やはりここでも気分転換のためというのが82人とひじょうに多く、場所の不公平をなくするというのが42人となっている。

寮生活における大きな問題の一つはプライバシーの保持ということである。かれらもこの問題に悩んでいることは、「プライバシーの場を工夫してつくっている」が83人、「工夫しようとしても不可能である」が8人、「その必要を感じない」が18人という結果に、また、「快適な生活をするには一部屋何人ぐらいが適当だと思いますか」という質問に対して1人が適当だというのが18人、2人がよいというのが45人、3人がよいというのが36人に対して、4人以上と回答した人が13人しかいないこととあらわれていると考えられる。なお、理想的な一部屋当りの人数と

小田・松村：高校教育と看護教育との関連

兄妹数および性格との関連を調べてみたが、第13表・第14表からわかるようにほとんどそれらとの相関関係はないと思われる。

プライバシーに対する欲求が強いことは、また、一日の寮生活のうちで一番楽しい時はいつですかという問いに、「他人との関係から解放されて一人となってから眠りにつくまで」と答えた人が、「友だちと話しあうとき」とした30人について多い17人という結果にあらわれ、逆に最もつらい時は「一人になれないときである」という人が6人いるということにあらわれている。(第15表、第16表参照)

兄妹数	人 数				
	1 人	2	3	4	5
0 人	1	1	2	0	0
1 ~ 2	7	20	9	5	0
3 ~ 4	4	12	21	4	1
5 ~	6	12	4	3	0
計	18	45	36	12	1

第 13 表

性 格	人 数				
	1 人	2	3	4	5
内 向 的	7	17	14	7	0
外 向 的	8	25	17	4	1

第 14 表

時間に縛られた寮生活が窮屈でしようがないと答えた人が30人、はじめは窮屈に感じたがいまは慣れてしまったと答えた人が62人、はじめから窮屈とは感じなかったとした人が19人となっている。これを性格との関係において調べてみると第7図になる。この図から明らかなように、性格が外向的な人の方が内向的な人にくらべて規則正しい生活に適應しにくいという傾向があらわれている。このように性格による差はでているものの学年別の差はほとんど見られないところから、寮生活の経験の長さが適應機制を生み出すことにはならないと推定される。

つぎに、寮内における学習の状況はどうであろうか。第17表は毎日決

	1 年	2 年	3 年	計
友だちと話しあうとき	9	11	10	30
ねむりにつく前	9	4	4	17
自分自身の自由な時間をもつ時	6	5	5	16
授業が終わったとき	3	0	7	10
食事の時間	2	1	0	3
入 浴	1	0	2	3
散 歩	1	1	1	3
深夜の勉強・読書	0	0	3	3
クラブ活動のとき	1	0	0	1

第15表 一番楽しい時

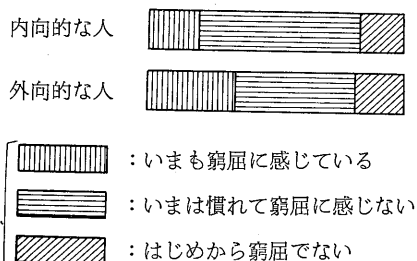
	1 年	2 年	3 年	計
起 床 時	12	9	12	33
実 習	4	1	4	9
一人になれない時	0	2	4	6
病気になった時	2	1	3	6
試 験 時	3	1	1	5
仲たがいの時	1	1	3	5

第16表 一番つらい時

京都大学教育学部紀要Ⅹ

った時間に勉強しているかどうかをたずねたものであり、第18表は学習する時を示している。毎日決った時間に勉強するという人が意外に少ないのは、個人の学習計画がグループ生活のために損われやすいことを示していると考えられる。主として誰と勉強するかという質問に対して、1人ですするというのが圧倒的に多い。部屋の仲間とする（6人）とか他の部屋の仲間とする（5人）と答えた人も一人て勉強するというのが主体であるようである。団体生活から解放されて自由な時間をもちたいという欲求を個人学習の時間に見出そうとしているとも考えられるが、グループ学習をすることのできる部屋のないこともその一因となっているのではなかろうか。

第3に、食の問題を検討することにした。これに関しては相当の不満があるようで、多くの不満ないし希望が出ている。（第19表参照）食事はきめられた時間に食堂ですするという原則から、この寮では部屋での食事は禁止されているが、果たして守られているであろうか。第8図は月平均部屋で食事をする回数を示したものである。食事を部屋でする理由は、「楽しく話しあう場をつくり出して、親交を深める機会とする」とか「少しでも家庭的な雰囲気を感じたいため」とか「気分転換のため」がほとんどである。



第 7 図

	決った時間に する	大体決った時 間に	不規則に
1 年	0	10	28
2 年	0	11	23
3 年	4	24	12

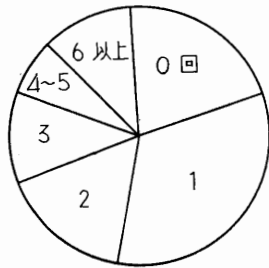
第 17 表

	授業開始 まで	昼食時 で	4~6時	7~9時	9~11時	11時以降
1 年	4	2	0	10	26	0
2 年	3	0	0	7	30	0
3 年	3	0	0	12	25	9

第 18 表

	1年	2年	3年	計
変化に富んだ献立を	14	10	9	33
食堂を美しく広く	5	6	16	27
副食の量を多く	9	7	8	24
野菜を多く	6	5	6	17
美味の食品, 味付に工夫	6	2	4	12
魚料理が多すぎる	5	1	4	10
ビタミンを多く	1	2	3	6
食器をきれいに家庭的に	3	2	0	5
夕食が早すぎる	1	1	2	4
食堂を寮内に	2	0	1	3

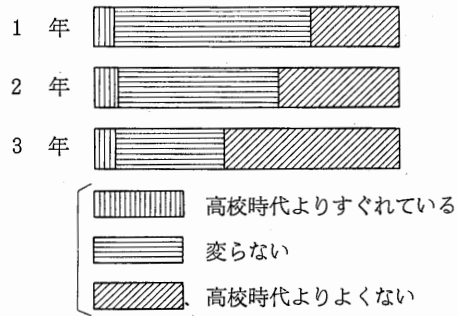
第 19 表



第 8 図

ところで、食生活とも関係するの
であるがかれらの健康状態はどうで
あろうか。学年別にあらわしたのが
第9図である。3年生では健康状態
が高校時代にくらべて悪化している
人が半数以上になっている。また、
よくない原因として考えられている
ものを整理すると第20表となる。精
神的に緊張した生活を送っているも
の、それに見あった身体の運動が
不足しているという、いわゆる精神
と身体のアンバランスに一番の原因
があるようである。

第4に、こづかいをどれ位使って
いるであろうか。第21表はその総額
を、第22表は親からの仕送りの金額
を示したものである。統計にあらわ
れた額が果たして十分なものである
のかはわからない。しかし、食・住
に不満の声が強いながらも、親から
の送金が月額5,000円でなんとかやっ
ていけるというこの事実を忘れては
ならないと思う。なお、「友だちと
の間でこづかいのやりくりをします
か」という質問に対して58人が「ほ



第 9 図

	1年	2年	3年	計
栄養のかたよりと不足	3	4	6	13
精神的疲労	2	4	5	11
運動不足	0	4	4	8
実習がきびしい	2	1	4	7
睡眠不足	0	0	2	2
食べすぎ	1	0	1	2
人間関係のむづかしさ	0	0	1	1

第 20 表

	3千円	4	5	6	7	8	9千円 以上
1年	9	6	17	3	2	1	2
2年	2	7	8	11	3	3	0
3年	1	10	11	8	8	2	1

第 21 表

	0	2千円	3	4	5	6	7千円 以上
1年	0	1	4	7	11	8	6
2年	2	0	7	5	13	6	1
3年	0	1	6	7	19	5	2

第 22 表

	1年	2年	3年	計
買物をするため	30	24	35	89
異性の友に会うため	10	9	23	42
同性の友に会うため	13	12	13	38
親類へ行くため	8	13	9	30
家へ帰るため	9	3	9	21
けいごのため	9	3	4	16
クラブ活動のため	5	3	6	14
散歩のため	5	4	5	14
教会へ行くため	1	2	4	7
映画を見に行くため	1	1	3	5
観光のため	1	3	1	5
図書館へ行くため	3	0	0	3

第 23 表

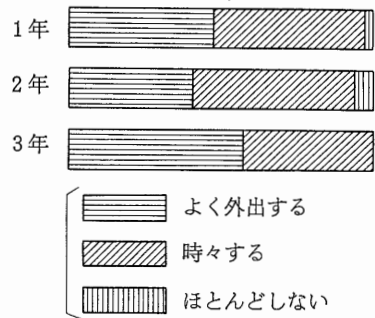
とんどしない」と答え、また、「自分のこづかいについて友だちに話したことがありますか」に対して30人が「全然ない」と答えている。

第5に外出と異性との交際を考察する。第10図から明らかなように、かなりよく外出している。その目的としてあげられたものを整理すると第23表となる。「買物をするため」というのが多いのは当然であるが、「異性の友だちに会うため」というのも案外多い。これに関連して、「あなたは異性との交際の機会をもつことが困難ですか」という問に対する回答を検討してみると、(第11図参照)1年生でも「別に困難でない」と答えた人が14人いるが、これには上級生が何らかの影響を与えていると考えられる。

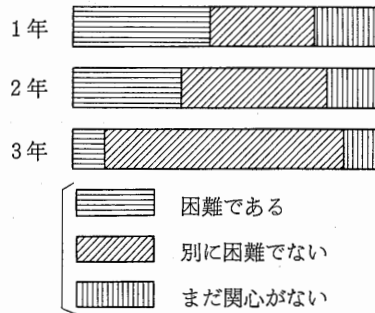
つぎに、政治・社会運動に対する関心とクラブ活動をとり上げる。まず、政治・社会運動への関心の程度はどうであろうか。第24表によると上級生になるにつれて関心をもつ人の割合が高くなっているが、進んでそれに参加している人はひじょうに少ない。具体的に運動名を求めたが回答者はひじょうに少なかった。なお、政治・社会運動に関心をもつに至った原因を第25表に示しておいた。

	関心あるが参加しない	すすんで参加する	友だちに誘われて参加する	関心がない
1年	11	2	6	20
2年	19	2	0	12
3年	20	3	7	10

第 24 表



第 10 図



第 11 図

	マス・コミ	先輩	寮友
1年	7	4	5
2年	7	4	5
3年	7	6	9

第 25 表

クラブ活動に参加している人は、3年生は国家試験が近づいたため少ないが、1・2年では9割弱になっている。主たるクラブをあげると、文化クラブでは、社会クラブ28、茶道15、華道12、英会話9、リクリエーション・クラブ9、マンドリン6、美術4、文芸4、音楽4である。運動クラブでは、卓球8、バレーボール7、登山5、ダンス4である。体育施設が十分でないこともあって、運動クラブは文化クラブにくらべて登録人員が少なく、あまり活発ではないと思われる。また、いまのクラブを選んだ理由に関しては、すでに触れたように、高校時代にしてきたものを継続するというよりも、ここに入学して新しく関心をもったということが動機となっていることは興味あることである。勉学との両立の問題は運動クラブ員が少ないこともあってかうまくいっているようで、両立していないと答えた人は5人にすぎなかった。

ここでクラブ活動をしていない人の意見を聞いてみよう。「勉強に精を出すため」8もさることながら、「クラブ活動をしたいと思うが自分の好みのクラブがないため」が17と最も多くなっている。学生数が少ないということが多くの種類のクラブを結成することを不可能にし、また、クラブ活動の範囲を狭くすることになっているわけである。他の看護学校や大学とのクラブの交換会をもったり、連合クラブを結成したりすることによって、学生数の不足を解決していくことが、クラブ活動を盛んにする上で必要のように思われる。そしてそのことが看護学校の孤立性・閉鎖性を打破するのに役立つことになるであろう。

クラブ活動とは別に、学校外で何を習っていますか、また将来習いたいと思っていますかとたずねたところ、就職グループにくらべて、現在習っている人も少ないし、習う計画をしている人も少なくなっている。その主なものをあげれば、現在習っているものには、華道9、茶道4、琴4、書道2、英会話2があり、将来習いたいと思っているものには、華道26、茶道24、洋裁21、料理14、英会話8、書道6、和裁5がある。

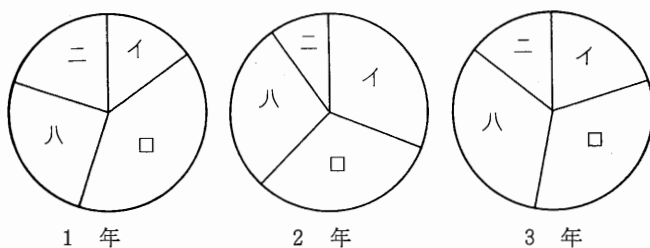
最後に、看護学校における全寮制について学生の意見を聞くことを通して問題点を探り出してみたい。

1年ないし3年間寮生活を送ってきた学生たちはそれをいかに評価しているであろうか。寮生活が自分にとってプラスになっていると答えたもの77人に対し、そうは思わないという人が26人、無回答11人となっている。プラスになっている理由としてあげられたものうち主要なものはつぎのようである。「協調精神を学んだ」15、「自制心の訓練」11、「人間関係のあり方を知った」9、「他人の長所を手本に自分の欠点をなおせた」8、「自立心の育成」7、「忍耐強くなった」7である。

プラスになっていないとした26人のうち、その具体的理由を書いている人は少なく、「性格が暗くなり、ひきこもるようになった」3が目立っている。

このように一応は寮生活のもつ意義を認めている人が多いのであるが、果たしてこれらの人々が今後も全寮制を維持していくことに賛成しているであろうか。この問題に焦点をあわせる前に、寮生活をどのように受けとり、いかなる精神的態度をとっているかをまず検討しておきた

い。「家へたびたび帰りたいと思いますか」に対する回答を見ると、各学年を通じて半数以上が大なり小なりホーム・シックにかかっていることがわかる。(第12図参照)このことはとりもなおさず寮生活になにかしっくりといかないものがあることを示している



イ、最近思うようになった
ロ、はじめから
ハ、はじめ思っていたが今は思っていない
ニ、思っていない

第 12 図

と思われる。寮生活に慣れるのに2か月以上かかったという人が34人もいることもこのことを暗示しているように思われる。(第26表参照)さらに、「下宿をしたいとか家から通学したいと思いますか」とたずねてみた。高学年になるにしたがって、「はい」と答える人の割合が高くなっている。すなわち、1年21人、2年22人、

3年34人が「はい」と答えている。「自分の思うことが自由にできる時間がある」19、「プライバシーが保てるようになる」11、「家庭的な雰囲気を味わえる」11、「対人関係のわずらわしさから解放される」10というのが「はい」と答えた人の理由となっている。これらはいずれも寮生活において満されていない

とかれらが指摘しているものである。しかし、これらの寮生の切実な要求を果たして家庭なり下宿生活が与えるものであるかどうかはよく考えなければならないと思う。「いいえ」と答えた人の理由はどうか。「寮生活そのものにほかでは得られないよさがある」という積極的な理由を述べた人は5人にすぎず、「通学がわずらわしいから」とか「下宿代が高くつくから」とか「実習を考えると寮生活以外は不可能だから」といった消極的な理由をあげた人が15人に達している。

第27表は「家へたびたび帰りたいと思いますか」と「下宿をしたいとか家から通学したい」との回答の関連を見ようとしたものである。「家へ帰りたいと思っている」人の方が下宿をしたいとか家から通学

したいと希望する割合が高くなっているのは当然であろうが、「家へたびたび帰りたい」とは思わない人で、通学を希望している人が相当いる。

	10日以内	半月	1か月	2か月以内	2か月以上
1年	6	5	9	6	7
2年	6	4	10	4	10
3年	1	4	9	8	17

第 26 表

寮生活になれるのにどれくらいかかったか

	最近家へ帰りたいと思った	はじめから	計	今は思っていない	はじめから思っていない	計
通学したいと思う	20	25	45	24	7	31
通学しないと思う	5	10	15	11	7	18

第 27 表

すでに見たように、寮生活がプラスになったという人が7割もいるのであるが、通学制度に対しては72人が賛成で、反対する人は12人にすぎないという調査結果に出会う。ある1年生は「自分1人では生活できないということがよくわかった」と寮生活のプラスを指摘する一方で、「独立した生活ができるから」と通学制度に賛成している。同様に、ある2年生は「いろいろの人に接することができて、協調性が養われた」と言いながら、通学制になると「広い考え方ができて、井の中の蛙にならなくてすむ」と言い、3年生のある人は「いろいろの地方から来ているので学ぶべき点が多かった。考えたり話しあう意義を知った」と寮生活の意義を認めながら、しかし、通学制度を採るべきだとして「通学の途上、あるいは家庭において接するいろいろな社会的な場面は偏りのない人格を形成するのに役立つと思う。また、看護学校の実情を正しく多くの人々に理解してもらうことができるようになる」という。このような意見を述べている人が多いのは、寮生活のもつ長所・教育的意義を知的に理解できないことはないが、しかも一方では、自分はもっと自由な学生生活を送りたいという欲求を制止できないところから生ずる精神的葛藤があらわれているのだと解することはできないであろうか。そして、そのどちらか一方に割り切ってしまうことができないという、いわば一種の緊張状態が寮生活に暗い影を落すことになっているのではないだろうか。通学制度に対する賛成派の論拠は、「全寮制の必要を全然認めない」というだけで、その具体的理由を書いていないもの10を除いて、最も多いのは「広い視野と社会性を養える」16で、それについて「自由な生活ができる」13、「看護学校を正しく社会に理解してもらえるようになる」7となっている。反対の理由では、「寮生活は協調性を養うのに役立つ」4、「寮生活は看護婦としての望ましい資質をつけるのに必要」3、「実習があるからしょうがない」3がある。「寮生活を改善するという方向でなら寮制賛成」という少数意見があったが、この意見にも注目すべきであると思う。

(8) 要 約

調査の結果を要約すると、つぎのような点を強調することができるであろう。

1. 前回の調査結果と同様に、高校での教科のうちで特に英語を充実させることに対する希望が強い。そのほか、化学・生物・国語の強化を望んでいるので、普通課程においても職業課程のように、将来の進路に十分に対処することができるバラエティーに富んだカリキュラムを設定することが望まれる。

2. 高校時代にクラブ活動をしたものが77%と高い比率を示している。ただ、運動クラブに入っていた人が意外に少なく、また、「親しい先生ができた」と答えている人がほとんどいないことは、クラブ活動を指導していく上で留意しなければならないことを示唆しているのではないかと考えられる。

3. 看護学校への進学を決意したのは大半が高校三年になってからであるという事実、および、進学について先生とよく相談したというものがわずかしかないということからして、将来

の進路と志望校の決定にあたって、生徒の適性を見きわめ、目先にとらわれず希望する職種の実態を十分に理解させるよう指導することが一層望まれる。

4. 看護学校での学習全般に関して不満であるとする人が大半を占めている。この不満はもちろん看護学校を大学化することによって一部は解消されようが、全面的に解決されるとはとても考えられない。調査にあらわれたように、みずから進んで学んでいこうとする態度が不足していることも一因となっていると思われるからである。そして、このような受動的な学習態度が高校時代に少なからず形成されていると考えられるので、高校での学習指導のあり方を再検討することも必要であろう。

5. 看護学校の大学化に賛成するものが多い。しかし、全寮制・無月謝による3か年の専門教育という看護学校のもっている特色に魅力を感じている人も少なくない。そのため大学化についてはさまざまな面からの慎重な考慮が払われなければならない。

6. 施設や運営方法に不満はあるにせよ、寮生活は表面上は秩序正しく営まれているが、心の触れあいに欠けているのではないかと思われる。クラブ活動は学生数が少ないため人員の確保がむづかしく、さらに、多くの種類のクラブの結成が困難なため低調と言わざるをえない。寮生活を楽しめるものにするためにも、クラブ活動の振興について真剣に取り組まなければならない。

7. 寮生活の意義を大多数の学生が認めているが、その反面、通学ないし下宿を希望するものも多い。したがって、二者択一的にどちらかに決定することは、さしあたっては学生自身にとっても困難なことであると言えるのではなからうか。

(この研究は昭和39年度、40年度文部省科学研究費による総合研究「青少年の人格形成の総合的研究」の一部をなすものである)

調査用紙

高校教育と看護教育との関連についての調査

このたび高校教育と看護教育との関連についてさまざまな面から調査させていただきたいと思います。つきましては率直にご回答下さいますようお願い致します。

イ、ロとあるものにはあてはまるところに○印をつけて①のように答え、()のあるところには記入して下さい。

京都大学教育学部教育課程研究室

A

1 高校進学について

① 出身高校所在地(府 市) ② 高校名() ③ (イ 共学 ロ 女子だけ)

④ (イ 全日制 ロ 定時制) ⑤ 課程別(イ 普通科 ロ 商業科 ハ 家庭科 ニ その他())

⑥ 高校を選ぶ場合誰が中心になりましたか。

イ 自分 ロ 両親 ハ 先生 ニ 兄弟 ホ 親類 ヘ 友だち ト その他()

⑦ あなたが②の高校を選んだのはどの基準によりましたか。

イ まず高校を選び、コースはそのつぎに考えた

- ロ 不満であるが、こづかいそれ自体が少ないので仕方がないと思う
- iii) 買った専門書を友だちの間に回覧しますか。
 イ よくする ロ 時々する ハ 全然しない
- ⑨ 現在修学期間は3か年ですが、
 イ 短かすぎると思う ロ このままでよいと思う ハ 長すぎると思う
- ⑩ 看護学校を大学教育の中に組み入れて学士号を授与すべきだという意見がありますが、これについてどう思いますか。
 i) イ 賛成 ロ 反対 ハ わからない
 ii) i) でイ、ロと回答した人はその理由を書いて下さい。
 ()
- ⑪ 看護婦という職業にたいしてどのような考えをおもちですか。
 i) 社会的地位 ()
 ii) 労働条件 ()
 iii) 報酬 ()
- ⑫ 当校への進学を希望している後輩にあなたの経験からどんなことを注意してあげたいと思いますか。
 ()

3 寮生活について

- ① あなたはどちらかといえば、
 イ 内向的(交際ぎらいで気分が沈みがち) ロ 外向的(交際好きで気分がほがらか)
- ② i) あなたには兄弟姉妹が何人ありますか。(人)
 ii) あなたは兄弟姉妹の何番目に当たりますか。(番目)
- ③ あなたには親友が何人いますか。
 イ 学院内(人) ロ 小学・中学・高校時代の友だち(人)
 ハ 京都市内の新しい友だち(人) ニ その他(人)
- ④ あなたの属する部屋の運営は民主的に行われていますか。
 イ 民主的に行われている ロ ある人の意見に従って行われている
 ハ まとまりがなく、運営についてほとんど話し合わない
- ⑤ いままでの生活からみて、
 i) イ 部屋がせますぎる ロ せますぎるとは思わない
 ii) 部屋のスペースを有効に使うために工夫していることがあれば書いて下さい。
 ()
 iii) 寮の設備について注文があれば具体的に書いて下さい。
 ()
 iv) 快適な生活するには一部屋何人ぐらいが適当だと思いますか。
 イ 1人 ロ 2人 ハ 3人 ニ 4人 ホ 5人 ヘ 6人 ト その他(人)
 v) 一部屋に1. 2. 3年生がまざり合っていることに対して、
 イ 賛成 ロ 反対 その理由()
- ⑥ 半年に一度の部屋の交替は別として、その部屋内で模様替えをしましたか。
 i) イ 全然しなかった ロ したときもあるが、しなかったときもある ハ いつもした
 iii) i) でロ、ハと答えた人は模様替えをした理由を書いて下さい。
 ()
- ⑦ 寮生活ではプライバシーを保つことが困難ですが、これについてはどうしていますか。

印をつけて下さい。

- イ 家へ帰るため ロ 親類へ行くため ハ 同性の友だちに会うため
ニ 異性の友だちに会うため ホ 買物をするため ヘ アルバイトのため ト けいこごのため
チ その他 ()
- ⑱ i) あなたは異性との交際の機会をもつことが困難ですか。
イ 困難である ロ 別に困難でない ハ まだ関心がないのでどうとも言えない
ii) i) でイと答えた人はその理由は、
イ 男女交際の秘密を守ることが困難だから ロ 異性と親しくする機会がほとんどないため
ハ イ、ロの両方のため ニ その他 ()
- ⑲ i) あなたは家との連絡を主としてどのようにしていますか。
イ 手紙 ロ 電話 ハ ことづけ ニ 帰宅 ホ その他 ()
ii) 1か月に平均して何回ぐらい連絡をとりますか。
イ 1回 ロ 2回 ハ 3回 ニ 4～5回 ホ 6回以上
- ⑳ i) あなたは政治・社会運動に関心をもったり、あるいはそれに参加しますか。
イ 関心をもっているが、参加はしない ロ すすんで参加する ハ 友だちに誘われて参加する
ニ 関心がない
ii) i) でイ、ロ、ハと答えた人はその運動を具体的に書いて下さい。 ()
iii) i) でイ、ロ、ハと答えた人はその原因はつぎのいずれに主としてよっていますか。
イ マス・コミに影響されて ロ 先輩に影響されて ハ 寮友に影響されて
ニ その他 ()
- ㉑ あなたはいまクラブ活動をしていますか。
イ している ロ していない
- ㉒ ㉑でイと答えた人はつぎの質問に答えて下さい。
i) クラブ活動と勉学とは両立していますか。
イ 両立している ロ なんとか両立している ハ 両立していない
ii) あなたの属しているクラブ名は ()
iii) クラブ活動は寮内のおおやけの生活(起床、就寝時間の励行、清掃など)に支障を来たしませんか。
イ 支障を来たす ロ 支障を来たさない
iv) あなたがいまのクラブ活動を選んだのは、
イ 高校時代にすでにやっていたなじみがある ロ 友だちにすすめられた
ハ ここに入学して新しく関心をもつようになった ニ その他 ()
- ㉓ ㉒でロと答えた人はその理由としてあてはまるものにいくつでも○印をつけて下さい。
イ 勉強に精を出すため ロ クラブ活動をしたいと思うが自分の好みのクラブがないため
ハ 友だちがやっていないので自分だけがやるのはどうかと思うため
ニ クラブ活動をすると仲間にめいわくをかける恐れがあるため
ホ 両親その他に止められているため ヘ その他 ()
- ㉔ クラブ活動とは別に学校外で何か習っていますか。
イ 習っている、それは ()
ロ 現在習っていないが将来習いたいと思っている、それは ()
ハ 別に計画していない
- ㉕ i) 全般的に見て寮生活はあなたにとってプラスになっていると思いますか。
イ 思う ロ 思わない
ii) i) でイ、ロのどちらに答えた人もその理由を書いて下さい。

- ()
- iii) 寮生活が楽しいですか。　イ 楽しい　ロ 普通　ハ 楽しくない
- iv) あなたは寮生活になれるのにどのくらいかかりましたか。
イ 10日以内　ロ 半月　ハ 1か月　ニ 2か月以内　ホ 2か月以上
- ㊤ i) 家へたびたび帰りたいと思いますか。
イ 最近になって思うようになった　ロ 寮に入ったとき以来思っている
ハ はじめ思っていたが今は思っていない　ニ 思っていない
- ii) 下宿をしたいとか家から通学したいと思いますか。
イ 思　う　ロ 思わない　その理由は()
- iii) ii) でイと答えた人はいつごろからですか。()
- iv) 通学制度を採用しようということがあちこちの看護学校で話題にのぼっていますが、あなたはこれについてどう思いますか。
イ 賛　成　ロ 反　対　ハ わからない
- v) iv) でイ、ロと答えた人はその理由を書いて下さい。
()